

り得るに至り、ゾロアスター教基督教佛教等との關係についても、ほど推知し得るに至つた、此等の經典中漢文に譯出せられて存するものゝ一つ、即ち曾て羅振玉氏が波斯教殘經の名に依つて出版したものは、シャヴンヌ、ペリオの兩教授が一九一二年及び翌年の *Journal Asiatique* に於て細かに研究して發表して居るし、中期波斯語で書いた重なるものは、獨逸のミューラー教授が一九〇四年に *Handschriften Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan* と題して出版して居る、その他回鶻文のもの、又は上述各國語で記した斷卷の一々の研究についてはこゝには省略する、但し短篇ではあるが、若しその所論にして正鴻を失はざれば極めて重要な性質を帯びて居るものは、一九〇九年に獨逸のル・コック (Le Coq) 氏の發表した *Ein christliches und ein manichäisches Manuskriptfragment in türkischer Sprache aus Turfan* の中に收めた一篇である、これはマニ經典ではなく、却つて全文皆佛典であつて、しかも有名な釋迦の四門遊觀を記したものである、然るにル・コック氏は之を以てマニ經典中に佛典を引用したものゝ斷片であると定めて、これに依つても佛教がマニ教中に重要な位置を占めて居るものなることを證明し得るといふて居る、若し此の考が正しいならば、マニ教の教義を研究する上から甚だ重要で且つ興味のあることゝ言はなければならぬ、然らば何故に氏は此の回鶻文の佛典の斷片をマニ經典の斷片だと定めたかといふと、これは其の經に加へた句讀點の形式が、マニ經典特有のものであるといふこと、及び新疆から發見せらるゝ佛典は、皆卷子か貝葉の形か或は摺本に成つて居るのに、この斷片は西洋風の綴本であるといふ外形上の根據と、また同一の書に屬する他の斷片に、マニ教に關する文句が見えて居るといふ内部的の證據とに依るのである、此の外形上の證據の中、句讀點形式に依て立てた議論の取るに足らざることについては、曾て自分は明らかな實例を示して證明して